

酒井由紀子氏を偲んで

辻田直人

忘れられぬ日となった。平成16年6月26日長崎県考古学会総会の開催日であった。午後9時37分、酒井由紀子氏は静かに旅立たれた。享年61歳。くしくも県考古学会で行った遺跡の紹介は、酒井由紀子氏の最後の現場「十園遺跡」であった。

酒井家とは家族ぐるみでお付き合いをさせていただき、自分の家族や発掘調査の整理作業員さんと話をする際は親しみを込めて（註1）「酒井母」と呼んでいた。もちろん面と向かっては「酒井さん」である。よって、ここでは酒井母と呼ばせていただきたい。

酒井母は国見町神代出身、国見育ち、生粋の国見人である。長崎県教育委員会による百花台遺跡群の調査を皮切りに約20年間、国見町を中心に発掘調査に参加された発掘作業員である。国見町のみならず、遠くは南有馬町原城の発掘調査にも参加されている。単に自主的に参加するのではなく、作業員としての「うで」を見込まれてのことである。20年間の発掘調査の中で、酒井母は主に測量作業に携わってきた。平板実測・遺構実測・グリッド設定など、書き上げた図面はいったい何枚ほどになるのだろう。数百枚、いや、千枚はくだらないだろう。実測図の正確さ、スピードは調査員のそれを上回るほどである。近年は光波トランシットを自ら操り、グリッドの設定も行っていた。酒井母の「うで」は実測などの作業面だけではなかった。作業員をまとめ上げる魅力と力があつた。それは、親分肌のような人の前面に出て、人を操る力ではなく、裏方として常に回りのみんなのことを考え、気を配り、作業員間関係を背面から支えていたのである。これまでどれだけ酒井母に助けられてきたことだろう。

初めて酒井母に会ったときの印象は今でも忘れない。学生時代あまり現場経験の無い自分は近々開始する調査に不安があつた。そんな折、県文化課（現学芸文化課）安楽さんが出張の帰りに国見に立ち寄ってくれた。「作業員さんを紹介するから」と酒井母を呼び出した。夏の暑い日だった。役場裏の駐車場で待っていると、少しに日に焼けた酒井母がひとなつっこい笑顔でやってきた。「はじめまして」と、一言二言言葉を交わした。なんとなくそれまでの不安が小さくなっていった。人の心を和ませるような雰囲気酒井母にはあつた。その日から10年間、猛暑の夏も、雪の舞い散る冬も、毎年のように酒井母と共に現場の調査を続けた。これまで大きなトラブルも無く、現場の進行の遅れなどはほとんど無かつた。酒井母が現場作業員として居てくれたおかげで、スムーズに調査が進行したことを感謝している。未熟な自分をフォローし、現場の作業員さんたちの間を取り持ち、さらには測量まで、フル回転での働きに感謝している。

いろいろなことを酒井母から学ばせてもらったつもりである。今、酒井母の居ない現場で作業をしている。調査は着々と進んでいく。最近、酒井母の居ない現場にもだいたい慣れてきた。おそらくいっしょに作業している作業員さんも同じだろう。みんな口には出さないうがきつと自分と同じ気持ちに違いない。酒井母といっしょに仕事ができよかつた。今までありがとう、と。

自分にとって酒井母は、現場でいっしょに仕事をする作業員さん、というだけでなく国

見町での「母」でもあった（筆者は長与町出身）。よく家にも遊びに行かせてもらった。

酒井家の皆さんと酒を飲み、朝までお世話になったこともあった。一緒にカラオケに行ったこともあった。私に子供が生まれた時には自分の孫のようにかわいがってくれた。3歳になる息子は酒井母のことが大好きで「酒井のおばちゃん」と呼び、酒井家に遊びに行くのが大好きだった。葬儀の朝、出棺する酒井母の棺の横でなかなか離れようとしなかった。遠くに逝ってしまうのが分かっているかのように。

酒井母との思い出は数え切れないほどあり、紙面では語り尽くせない。酒井母と一緒に調査をした作業員さん、整理作業員さん、調査員の皆さんを代表して最後に一言言いたい。

「これまでたくさんの思い出をありがとう。そして、20年におよぶ発掘調査、お疲れ様でした。今後も続く調査を見守ってください。酒井さんの分までみんなでがんばっていきます。」そして、いつの日かまた、どこかでいっしょに調査をしましょう。そのときまでに酒井さんの書き上げた図面の枚数を追い抜いときますよ。

※ 今回の追悼文を書いてよいものかどうか、迷った。現場の一作業員さんではあるが、自分にとって非常に大きな存在であり、また島原半島の調査担当者、長崎県学芸文化課の調査員の皆さんにもなじみの深い方でもあり、追悼文を書かせていただいた。西海考古同人会事務局からは執筆の推薦もあり感謝している。

註1) 親しみを込めて、ということもあるが、酒井由紀子氏の娘さんも整理作業員として一緒に仕事をしていたので、娘さんと話しをしているうちに、「酒井さん」ではどちらか分からないため、「母」をつけて呼んでいた。



平成15年12月24日 十園遺跡にて

現地説明会后に駆けつけてくれた国見町長・渡邊秀孝氏と
(左端一酒井母、中央一渡邊町長、右端一筆者)

平成7年4月 佃遺跡

圃場整備事業に伴う遺跡範囲確認調査の最後の試掘坑で初めて出土した甕棺の実測風景。いつもの実測仲間と。

(右手前-酒井母, 奥-宮崎保子氏, 左-塚野真由美氏)



平成14年2月8日 十園遺跡21区

1号製鉄炉(写真手前)実測中。
(中央-酒井母, 右-筆者)

平成14年12月19日
現場の仕上げ会場(割烹もとよし)

酒井の‘おばちゃん’と筆者長男。



平成15年12月18日 十園遺跡47区

いつも一緒の作業員さん達と。
(左端-酒井母, 前の二人は内業さん。
左-早稲田一美氏, 右-濱本秀美氏)

※21区1号製鉄炉と47区掘立柱建物群は竹中・辻田
2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)
第4集 長崎県国見町教育委員会で報告済み